

第三回 平成二十六年(二〇一四)年 六月二十一日

夙川文化探訪 ― ミュージアムとの出逢い ―

塩田 昌弘 (しおた・まさひろ)

初めまして、塩田と申します。よろしくお願ひします。

今回と次回、「夙川文化探訪」というテーマでお話させていただきます。美術館の勤めが長かったので、「ミュージアムとの出逢い」を入れさせていただきました。夙川のことを考察していこうと思っっているのですが、私自身は昭和四十年代に大阪市内の道頓堀とか日本橋の方で過ごしましたので、その頃から、夙川という所は、少し手の届かない上品なといいますか、そういう所と感じておりました。そして以前に阪神文化とか阪急文化について、小冊子に書いたことがあります。その論考で阪神文化と夙川文化を考察した時も、微妙な温度差と申しますか違いを比較することができて、やはり夙川文化は、非常に上品な文化であることが分かってきました。

そこで、この講座をお引き受けした時、夙川とは一体どんな所か、どのような文化施設があり、ミュージアムがあるのか、どのような文化を発信しているのかをまず調べてみようと考えました。私が東京都美術館を皮切りにいろんな美術館に学芸員として勤めたおり、美術史的に関係のあるものを購入したり、作品を解説して発信することをしていました。ミュージアムにこだわると、その美術館がそこにあると

いうことは、その地域、その文化、代表的なその土地柄の作品である文学や美術や考古遺物を当然扱っていることになります。ですから、夙川近辺のミュージアムを調べるのも、夙川文化を理解するのに有効ではないかなという感じがありました。それで「ミュージアムとの出逢い」というのを副題に使った次第です。

これは二つの意味を含ませております。一つはこの夙川という地域・風土にミュージアムがたくさんあります。ミュージアムの由来とか歴史そしてコレクション、どんなものを収集しているか。これは美術館があつたり、歴史資料館であつたり、文学館があつたりしますので、発信する文化を総合的に見れば、なんとか夙川文化がこういうものであるという大体のことが分かるだろうという考え方で、一つ一つ調べていくという方法です。もう一つ、夙川文化に関連する美術、文学、歴史等を深く広く理解するためには他の地域、隣接する地域のミュージアムの持つている資料と、夙川近辺のミュージアムが保存あるいは収集している資料を比較検討してみれば、自ずと夙川文化の典型的なものが見えてくるであろう、という視点です。他地域とは、東京であつたり鎌倉であつたり京都であつたり奈良であつたり、また大阪、神戸などがそれにあたります。この二つの視点から、「ミュージアムとの出逢い」ということを考えついた次第であります。

本講座は前半と後半に分かれます。今日はその一回目ということでお聞きください。今回は、私が調べました夙川文化関係に関する資料を紹介し、夙川文化探訪ということでお話したいと思います。

一枚目のスライドですが、これは夙川にかかった国道二号線の夙川橋から撮った写真です（写真1）。春先ですね。ここに多くの美しい桜が咲きまして、そしていろんな人が楽しみに訪れる。桜が満開になった頃、最も夙川が華やかになります。非常にきれいな桜を毎年見ることができます。夙川橋の写真を映しますのちよつとお待ちください。

JRさくら夙川駅から本校に来られるときに、坂道を登り切ったところに夙川橋がかかっております（写真2）。橋の手前に四つ角がありますね。これはその近辺の風物です。ここを通って大学に通勤しています。

夙川に沿って公園があります。夙川公園は昭和七（一九三二）年に工事が始められまして、昭和十二（一九三七）年、竣工しました。公園は夙川のほとりを、ずっと北のほうに県道八十二号線が夙川にかかる銀水橋まで伸びていっておりますし、下の南のほうは大阪湾に注ぐ西宮回生病院のあたりまであります。その夙川の両サイドに、川のほとりに桜がずっと咲いております。夙川橋は細長い夙川公園の真ん中あたりですね。戦後、昭和二十四（一九四九）年、千本の桜の若木が植樹されたと聞いております。そして、昭和四十五（一九七〇）年、これは高度経済成長のさなか、大阪で万博があつたときですね、夙川の鉄橋から北山ま



(写真2) 夙川橋



(写真1) 夙川

で夙川の上流方面に道が完成いたしましたして、そして平成二（一九九〇）年に「日本桜の名所一〇〇選」（夙川公園・夙川河川敷緑地）に選ばれております。さらに後年、「日本の歴史公園一〇〇選」（夙川公園）に選ばれているということで、この夙川桜と歴史そして文学、こういった桜をめぐる文化の融合した魅力は素晴らしく全国的に評価されております。自ずと近辺には文学とか歴史とか、そして桜に係する事蹟が多く、魅力的な都市を形成しています。

夙川橋を渡るとすぐ、大学の近くに夙川公園の花の広場があります。公園の入り口といってよい位置に公園のスペースシンボルのようにモニュメントが存在します（写真3）。今年が午年ということとは関係なく、馬のような彫刻と理解するのは容易なことだと思えます。白御影石と黒御影石で制作され、抽象の現代彫刻でモニュメントといえる作品です。白い御影石で少し粗く彫ってありますので、生き生きとした馬の表情を見取ることができません。そして、背の部分は黒御影石ですね。これは、馬の鞍を表現しています。夙川ライオンズクラブが昭和六十三（一九八八）年に寄贈したものです。そこで当時の図面を、西宮市商工会館の夙川ライオンズクラブから取り寄せてみました。その図面からは、市役所公園課で夙川公園の花の広場を設計した段階から、そこにこういう彫刻を設置するんだという事で寄贈をされたことがわかりました。また、モニュメントの題名は「夙川公園・花の広場」。これがタイトルであると、ここに示されてい



（写真3）
夙川公園・花の広場モニュメント

ます。作者名は分かりません。作者が意図的にそうしたのかもしれない。

モニュメントは、馬のように見えています。横に水飲み場があるんですね。桜が咲いた時、馬に乗って夙川に来た貴人が水を「食む」と申しますか、馬に水をやるために、桜に馬をつないでおくのと見てとることができません。したがって、馬・水・桜というこの三つを合わせまして、環境芸術を示唆していると思われまます。

また、この三つのキーワードで思い浮かべるのが、大阪の藤田美術館所蔵の「桜狩蒔絵硯箱」と名づけられた、「葦手」という技法を使い螺鈿らでんでつくった硯箱すずりばこです。「またやみんかたののみの」という文字を蒔絵まきえとして蓋にはめ込んであります。蓋の裏にこういう光景があります。桜の花を螺鈿で表現している。貝を薄く切ってはめ込んであるんですけれども、花の雪ちる様に花びらが散っております。また、硯すずりと筆を入れるところにも、春の曙の景色を象徴的に表現している。これは枚方の禁野辺りの平野のこゝとを「御野みの」と呼んでるんです。皇室の所領だったということ、「いつかまた見ることがあろうか。交野の御野での桜狩り。花が雪のように散ってくる、この春の曙の景色を」という意味です。この花が雪のように散ってくる。有名な谷崎潤一郎の小説『細雪ほそゆき』の題名を連想させる、非常に美しい光景です。

こういう伝統的な自然を愛でた歌、それをヒントに今の夙川橋の公園の入り口にこれを造形したといふのは、すごい構力かなと思っております。非常に夙川らしい雅な感じがいたします。しかし、古いだけではなく夙川の知性、それを現代にさりげなく主張してるところがいかに夙川らしい感じを与えています。これは一つの伝統的な古典のあらわれですね。これを現代に生かしている、都会的なセンス

を見ることが出来る作品があります。京都の国立近代美術館が所蔵している、鈴木治という現代陶芸家の作品「馬」です。（『京都国立近代美術館所蔵作品選』京都国立近代美術館、一九八六年、二八〇～二八一頁）。抽象の馬で面白いと思うんですけども、これと比べて見ても先ほどのものは遜色がない、見劣りしない感じがいたします。

古来から雪月花の世界を扱った歌がたくさんあります。どういうわけか高僧、僧侶のものと、そして武士のものが多い。いくつかご紹介しましょう。（『美しい日本の私』川端康成著・講談社・一九六九年参照）

またや見ん 交野の御野の 桜狩り 花の雪散る 春のあけぼの

「桜狩時絵硯箱」で紹介した俊成卿の歌です。続いて三つとも僧侶が詠んだものです。

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すすしかりけり

これは道元です。「本来ノ面目」という題があり、これがつくられた。その次に明恵上人です。

雲を出でて 我にともなふ 冬の月 風や身にしむ 雪や冷たき

あと、良寛辞世の歌、

形見とて 何か残さん 春は花 山ほととぎす 秋はもみぢ葉
の様な歌です。

吹く風を なこそそのせきと思へども 道もせに散る 山桜かな

これは源義家、八幡太郎義家です。東北のほうに平定するために向かっている時、桜が散っている。大量に散っているのを見て一首詠んだものです。伝説では、その様子を見て文武両道の人だということが知れ、反乱がおさまったといひます。

それから平忠度たいしゆのたぢりです。源氏と平家が戦う。最終的には平家が都落ちをする。西のほうに逃れていく。もちろん源氏が追いかけて行きます。その時に、忠度は、日頃、俊成卿に歌を習っていた。それで、どうせ死ぬなら一首歌を残しておいてほしいと伝えました。

さざなみや しがの都は あれにしを むかしながらの 山桜かな

のちにこれを、勅撰和歌集の『千載和歌集』に撰者の俊成卿は「読み人知らず」として入れました。賊になっておりますので読み人知らずとしてその歌をとりあげたんです。ただの秀才ではなかったんですね。おもしろいですね。それから、忠度は明日決戦というときに、もう平家はどこも頼って行くところがありませんから、野宿をします。

行きくれて 木の下かげを やどとせば 花やこよひの あるじならまし

桜が咲いている、桜の木の下で一夜を過ごした時に詠んだ歌です。それを箆えびらに——矢の箱です——矢を入れて結びつけて戦場に臨んだ。もちろん多勢に無勢ですから、首を取られた。そのため、源氏方はこの武士が誰かわからなかった、決め手がない。しかしこの歌でもってこれは忠度だと分かったので

す。

以上は、僧侶と武士の、雪月花を詠っている歌の例です。桜の花が入っているというのが、風流と申しますか人情の機微が分かる、自然を愛でながら人生の哀歎を知る名歌だと思われれます。こういう歌を読みながら他の工芸品を見ると、なるほどどうなずけます。昔から「駒つなぎの桜」という画題があり、他にもいろいろ詠んだものがあります。このようなものを下地にと言いますか、伝統的なものを大事にしながら、夙川橋のところ現代彫刻、立体造形、環境芸術をさりげなく設置してある。非常に高度な芸術・文化趣味のある人たちが夙川にはいらっしやるんだということが見えてきます。

他にも、江戸時代の伊万里焼の器にも、桜と休んでいる馬がモチーフになつてゐるものが見られます。当時、流行っていた。好まれたんですね。外国でも好まれたようです。

夙川関係のもので特記事項は、谷崎潤一郎石碑文に関する事です。これは大手前大学の夙川キャン

パスの校舎ですが、そこに、あとでお見せしますけれども、おむすび型の碑を見ることが出来ます。

我といふ 人の心は たゞひとり われより外に 知る人はなし

有名な谷崎の歌が読めます。これをちよつと覚えておいてもらいましょう。

ここで、篠田一士(はしめ)(文芸評論家)のまとめた『谷崎潤一郎随筆集』(岩波書店、二〇一二年)から、「私を見た大阪及び大阪人」をご紹介します。この随筆集は一九八五年の八月十六日が第一刷ですね。私が持っておりますのは二〇一二年の五月十五日第二六刷の本です。それだけの時間の経過があつても、やはり今も夙川はその風土の中になにかしら雅な上品さを有している、と言えると思います。谷崎も「関西における最もハイカラな区域と言えば、阪急の夙川から御影に至る沿線で」と書いてあるんですね。つづけて読みますので、お聞きください。

「大阪の婦人の洋装は何となくスマートな感じが乏しい。近来心齋橋筋や梅田辺を歩いていると、時々衣裳持ち物に五分の隙もない素晴らしいモガを見ることがあるが、そんなのは大概東京から遊びに来た旅行者が多いようである。関西における最もハイカラな区域といえれば阪急の夙川から御影に至る沿線であつて、あの辺に住んでいる若夫人や令嬢たちは、随分洋服の眼も肥えているし、趣味も進んでいるし、金に不自由はないのだから、毛皮、手袋、ハンドバッグの好みまでソツのあろうはずはないのだけれども、それでいて何処かスッキリとしない。そうかといつて、勿論田舎臭いのも安っぽいものでもない。品のいいことは飽くまでいいのだが、つまり前にいう宝塚の少女と同様に、シャナラシャナラして、お

姫様が洋服をお召しになったという感じが、どうしても抜け切れないのである。」(一二四頁)と、こう言っております。もともと、谷崎は東京人形町辺りの下町に育っています。関東大震災で仕事ができせんので、こちらに来た。特に関西で最もハイカラな区域である阪急の夙川から御影に至る阪急沿線、この芦屋近辺、夙川近辺を舞台にして小説を書き、大作家になっていきます。この地区のことが好きであるから書けるんです。

たしか、川端康成がある本に書いておりましたけれども、少女が歩いている。緑の木がたくさんある街路を歩いてくる。そうすると、その空気が緑色になって、幻想的な感じになるというのを読みました。それとまったく同じことを今でも体験することができます。今、日が射してきましたが、天気の良い日に阪急電車に乗りまして、夙川から御影のほうにずっと鈍行で行きますと、夙川を出たすぐあたりからずっと緑色のツタのようながあります、全体に緑色の空気が流れているような、そういう瞬間にとられます。このようなことを言っておられたのかなと思いました。電車の中ですけれど、非常にこの世のものと思えないような美しい少女の顔が見て取ることが出来ます。つづけます。

「これは色合いばかりでなく、彼女たちの骨格や動作などがよほど関係しているに違いない。関東の方は昔から野蛮な気風があり、女でもキビキビしたのが喜ばれたのだから、それが現代のフラツパアの心意気と比較的容易に合致して、坐作進退ざさしんたいや表情法などもヤンキー式に同化する可能性が多いのに反し、関西の方は服装ばかり取り換えても、体のこなしに数百年来のしとやかな習慣が沁み込んでいるのであるまいか。」(「私の見た大阪及び大阪人」『谷崎潤一郎隨筆集』一二五頁) そういう伝統ですね。女性の

美しさとか、装いは進化ではない。なかなか新しいほうにすぐに飛びつくということはない、そういう言い方ですね。そうなったからいいということではない。女性たちを見ても、その違いがあると言っている。「東京の下町では、婦人の洋装なぞというものが絶対に見られなかった私の幼少の時分、若い女が夏になるとよく腕まくりをしたもので、私の母なぞは浴衣の両袖を肩の上までたくし上げて団扇を使っていたことがある。」（「私の見た大阪及び大阪人」『谷崎潤一郎随筆集』一二五頁）と書いているのも、そのような文化の違いがあるということですね。

有名な鏝木清方かたむねきよかたの『築地明石町』という近代美人画の名作があります（個人蔵）。描かれているのは玄人の女性ですけど、凛とした表情があり、粹だなと感じます。ああいう婦人を谷崎は見て大きくなってきたのでしょうか。だから、こちらに来ると何か上品でお嬢さんっぽい顔立ちの女性が多く、こういう大人の女性にはなりきれないところを発見したんですね。

せっかくなので、他にもいくつか美人画をあげてみます。MOA美術館蔵の三幅一對の軸装の錦絵『雪月花』。これは「見立て」といって、当世の婦人を平安王朝の三才媛に見立てて描いたものです。一幅目は、「香爐峰の雪はどうして見るんだ」と言われると、御簾みすずりをかかげて見るという、清少納言が応えた故事（『枕草子』第二百九十九段）に見立てて描かれています。二幅目は、石山寺の紫式部が月を見て物語を創作している姿が描かれ、三幅目は「花の色はうつりにけりな…」と詠んだ小野小町が描かれています。

他にも、関東の伊香保の女性を描いている『伊香保の沼』という松岡映丘の作品（東京芸術大学美術館所蔵）や、これも江戸の浮世絵ですが、北斎を非常に尊敬していた画家蹄斎北馬ていさいほくばが描いた美人画『秋郊美人』などがあります。ちよつとこう裾が乱れてまして野性的な感じがします。これは、若い女が夏になると腕まくりをしたと谷崎のいう感じを持つている女性です。私はこういふところにもよさがあると思います。京都もそれに近いですね。ただ上村松園の作品は、ひやかすと怒られるような感じがしますね。毅然としたところに美しさを堅持していた女性たちがいたということです。いずれにしても、これらの美人はすつきりとしています。それが、大人の女性の美しさであると、言ってるんですね。

このように谷崎が比較しているように関西の特に夙川とか御影とかの非常にハイカラですけれども、なにか谷崎にはつかみにくい女性が多かった。それが小説のもとになったと思うんです。そういう女性が文化を造る、それがもし本当であれば、そういう文化がこの近辺には育てられてきたと思います。

また、『文豪ナジビ谷崎潤一郎』（新潮文庫、新潮社、二〇〇五年）の「編者からひとこと」（五十八頁）によれば、編者は谷崎潤一郎をいっぱい読んだ。特に『細雪』を何回も読み返したんですけど、どこにも雪が降ってる景色はないと言ってますね。おそらく谷崎は

またや見ん 交野のみ野の 桜がり 花の雪ちる 春のあけぼの

という俊成卿の歌を知悉ちしつして、そしてその象徴として雪子さんを創出し、話を展開していったと思

います。だから、この辺りの桜が咲く頃、美しい女性が闊歩する。非常にハイカラですけども、心の中には伝統的なものもちゃんと理解する能力が十分ある。そういうところを理解すれば谷崎の『細雪』がもつとよくわかるだろうと思っております。

話は変わりますが、先日、古本屋さんで『大阪ざらい物語』（布井書房、一九六二年五月二十日）を見つけました。私は大阪育ちですので、大阪嫌いと言われるとギクツとするのですが、これは好きであるがゆえにこういうタイトルにしたということが分かってきました。著者は、鍋井克之という大阪の画家です。大阪画壇の話をするならば、彼は必ず出てきます。鍋井克之ゆえに買ったのですが、表紙の裏に薄田桂うすきたかづという名前が毛筆で書いてありました。非常に勢いがあり、著者本人が書いて進呈したんでしょう。古本屋さんで扉の見返しは見なかったのですが、家に持って帰ってから発見しました。薄田泣董うすきたなきゆうじんという文学者の息子さんのようです（薄田桂「父・泣董を語る」『大阪春秋』第七号、昭和五十年七月）。

薄田泣董といえば、本学園理事長の祖父・福井治兵衛（艸公）と親交があつて、福井治兵衛が住まいを提供したりもしていました。福井家はいろんな芸術家のパトロンで、そして芸術家を育て上げていく。芸術家にすればそういう非常にありがたい人でした。思いがけずこの二つが結びついたので、絶対に公開講座で紹介しようと思っていました。こういうことをここで私がしゃべっているということに、不思議なご縁を感じます。

本学と夙川のかかわりについては、前回までの講座でご紹介させていただいているようですので、こ

ここでは詳しくは触れませんが、大手前大学は、夙川と伊丹、二つのキャンパスがあります。特に夙川と伊丹は江戸時代からの酒造りの街として有名ですけれども、伊丹は山中鹿之助の関係者が当時の鴻池町で清酒造りに成功して、江戸時代には日本で最大規模の酒造業の町に発展したことで知られていますね。その酒造りの遺跡が郷町遺跡で、当時、樽廻船などで江戸へわたっていました。将軍への献上酒として知られる「剣菱」や「老松」、その他には「男山」なども、今も受け継がれている銘柄です。

私は夙川のキャンパスに勤務しておりますが、仕事を終えて研究室を出る頃は、夜の七時を過ぎるんです。夙川橋を越えていくときに中天にお月さんが出ております。帰り道ですから楽しくて、知りあいの人は誰もいませんし、春の夜など、頼山陽の「題不識庵擊機山図」を歌を歌いながら帰ったりします。夙川の「夙」と「鞭聲肅肅」の「肅」とは字が違っても音が同じだから、つながってくるんですね。

頼山陽は幕末の頃スーパースターでした。どこの勤王の志士も皆、彼を非常に尊敬していたという。頼山陽はお酒が好きで、お母さんと箕面に紅葉狩りに行った帰りに、阪上桐陰家に寄った。造酒屋さんで、文人墨客が当時よく来たんですね。接待してもらって帰る時になにか絵を描いたり書を書いたりして作品を置いていくことをしていた。その立ち寄った時に頼山陽は柿を出された。お酒に酔って体が熱い時に冷たい柿を食べたので、あまりの美味しさに驚きます。その柿はへたの部分が非常に大きくて、ひっくり返して出すと台に乗った柿に見えるので「台柿だいかき」と言うのですけれども、この柿は隣の家に住んでいる岡田家の柿だったのです。頼山陽はこの柿はただの柿ではないから、大事に育ててください、

守ってやってくださいと言伝えたので、岡田家ではその柿を大事にした。それが現在、「柿衛文庫」の名として残っています、柿衛文庫にはそういう由来があるんですね（東薫『新阪神史話』阪神サンケイ新聞社、一九八〇年、二三〇～二三一頁）。この柿を隣に渡して頼山陽との関係もできた。

その柿衛文庫や旧岡田家住宅は、伊丹の郷町ごうまちと言ってる一角、「みやのまえ文化の郷」にあります（写真4）。このように、この一帯に文化施設が入っています。

岡田家住宅は店舗・釜屋・酒蔵からなりますが、特に酒蔵は現在、年代が判明する中で最古の酒蔵として、重要文化財に指定されています。

柿衛文庫の俳諧関係の収集として一句、ご紹介します。

ふる池や蛙飛込水のおと

芭蕉の代表句です。その真筆を所蔵されています。ひらがなで「はせを」と書いて「ばしょう」と発音する。これがある限りは、東京大学に負けないと思います。東京大学の図書館と天理大学附属天理図書館とこの柿衛文庫は、日本三大俳諧コレクションとして有名です。他にももつと貴重なものを所蔵し



(写真4)
伊丹市立美術館

ています。

こうしたゆかりから、京都にある頼山陽の書齋を訪ねて行きました。山紫水明処といえます。

不識庵、機山を撃つ圖に題す。

鞭聲肅肅夜過河

鞭聲肅肅夜河を過る。

曉見千兵擁大牙

曉に見る千兵の大牙を擁するを。

遺恨十年磨一劍

遺恨なり十年一劍を磨き、

流星光底逸長蛇

流星光底に長蛇を逸す。

ご存知のように、武田信玄と上杉謙信の第四回目の戦いを頼山陽が七言絶句として作りました。先ほどお話しした、私が歌いながら帰る時の歌です。山の上に武田信玄が控えています。そして川の向こうに上杉謙信の兵が対峙していた。夜になって、暗くなり見えなくなってしまう。上杉謙信は川を遠回りして音をたてないようにして、山の下に陣取ろうとする。馬に藁を含ませたり蹄を藁で音をたてないようにしながら、鞭の音も立てないようにして静かに夜、謙信の軍勢が千曲川を渡って行った。明け方になりますと、霧が消えてくる。そうすると眼前に兵を見て武田方はあわてるんです。そういうところを書いてあるんですけども、油断するなということですね。(頼成一・伊藤吉三訳註『頼山陽詩抄』岩波文庫・

一九九〇年・頁二一九―二二〇)

この建物は茶室も兼ねられていました。煎茶を好んだらしいのですね。抹茶から入ったかもわかりませんが、抹茶を飲みすぎると胃がちよっと荒れます。煎茶のほうにやさしいそうですからね。書斎には節度ある大きさの「山紫水明処」の書がかつていて、庭には鴨川の伏流水をひいた井戸があります。頼山陽の書もありましたが、字も上手い。元気があります。

部屋を案内して下さる頼家ゆかりのお嬢様に「大学の帰り道、夙川橋をわたる時、『鞭聲肅肅、夜、夙川を過る』とか言って行くんですわ」と話をするにこっと笑っておられた。この方に「鞭聲肅肅、夜、夙川を過る」と言ってもいいですよ、と許可をいただきましたので、それをちよっと紹介しておきました。

余談ですが、京都大学の総合博物館にも行きました、どういう訳か、花の展覧会がありましたので、見ておりましたら、その先生が収蔵庫に入れてくれたんです。何か見たい物がありましたらと言われましたから、山桜を見たいと言いましたら、すると、ほんとうに山桜の標本を収蔵庫から取り出して見せて下さいました。これは、標本にしても臭いはしないんだと。植物は普通は臭いがするのですが、あれは一旦標本化するとスパツと臭いを断つ、というお話を聞いてきました。

ところで、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』（全八巻・文芸春秋）は国民文学になりました。みんなに愛されて非常な部数で本が売れ、有名です。最後は暗殺されてしまいます。しかし、時代の扉をこの青年が開いたというところでしまいます。私の学生の頃にこれが売り出されて、そして、NHKで大河ドラマが

放送されて第一回目のブームですね。福山雅治主演の『龍馬伝』をNHKが放映したら二回目のブームになりました。

この小説をちよつと読んでみます。(司馬の「竜馬」の小説なので表記はここからは、竜馬で統一します。)
「いまこの時期、英国と紛争をおこせば、目下幕閣や諸藩に対して事前工作中的土佐藩提議の大政奉還案は一挙に崩壊するほかない。竜馬としてはいまのところ、ひたすらに国内の無事を願い、犬の喧嘩をさえ怖れたい心境なのだ。」(『竜馬がゆく』「横笛丸」第八卷一五〇頁)

つまり、坂本竜馬は身分が低いですから、小御所会議など、大政奉還を認めさせるそういう会議には絶対出られない。そこでどうしたかと言いますと、山内容堂やまのつとむ、お殿様に言ってもらおうということしかできないうですね。後藤象二郎が、大政奉還を自分が考えたということで、提出する。そして認めさせる。竜馬にしたら、新しい時代ができたらいということをやっていたんで、そんなことはどつちでもよかったです。

英国との紛争と書いてありますのは、長崎に「亀山社中」という会社を持って、自分が経営しているんですね。丸山というところに花街があり、イギリスの水兵が斬殺されたんです。現場に提灯がのこつていてそれが竜馬の会社のものであるという可能性が強まった。その時ちよつと英国公使パークスが来ておりまして、徳川幕府にねじ込む。徳川はいま力が弱つてきているから、それは土佐のお殿様にお話をしてくれと逃げるんですね。英国軍艦と幕府軍艦は談判のため高知に行く態勢を兵庫港で整えている時だったんですね。竜馬はそれを知らないで、大坂の土佐堀にある土佐藩邸に行ったのですね。土佐藩の

上層部が兵庫に向かつて行ったそのあとを馬で追いかけて、竜馬が兵庫港へいくんです。

西宮に入ったのが二時間後であると。この時に土工の群れが歌を歌っている。それは西宮海岸の幕府砲台の建設に雇われている人達です。これは「勝海舟の設計による台場で、文久三年以来かれこれ五年もかかっているから、そろそろ完工も近いはずであった」(一六一頁)。しかし、これは使わないうで終わつたということですね。「西宮の宿を通る時、竜馬はいつもあの元治元年の蛤御門の変のころを思い出す」(二六一頁)という。その頃は「この西宮から五里さきの神戸村で海軍塾を管理していたが、塾から池田屋ノ変の関係者を出したことで、この変の敗兵を何人か収容したことで勝が幕府から疑われ、その失脚の原因になった。」(一六三頁)慶応三(一八六七)年ですから、それから三年経つんですけども、竜馬は長い年月が経つたようだと同想します。さらに続けて司馬は次のように書いています。

「竜馬は宿場の雑踏のなかをゆるゆると打たせ、やがて宿場はずれの夙川の乾いた河床に降り、それを越えおわつてから、馬に鞭をくれた」(一六三頁)。ここに「夙川」が出てくるんですね。国民的文学『竜馬がゆく』の中に発見しましてちよつとびっくりしました。大政奉還を通して新しい時代を迎えるために、小さなことですけども、災いを断つ必要があるという大事な場面で、竜馬が走つてきて、夙川でまづ一服する。そして、馬に水をやって自分も休み、そしてそれから一瀉千里に兵庫に向かった。現在の国道二号線もちょうど夙川橋にかけてかなりゆるやかな坂になってます。橋を頂点に下がっていくんです。そういうところまで司馬遼太郎は歴史を調べて、これを書いたのではないか、などと思ったりしています。

ところで、少し話がそれますが、大阪の小説家として有名な織田作之助は、生誕一〇〇年になつて、少しブームになりました。代表作は道頓堀の近くの法善寺を舞台にした『夫婦善哉』ですね。これは映画化されました。森繁久弥と淡島千景を主役に、豊田四郎が監督をし、映画でもヒットしました。法善寺の境内、お不動さんの前で雪が降ってくるなかなかいい場面で終わっています。あれもなんだか、『細雪』の影響を受けているような感じがします。水掛不動の前で二人で一所懸命生きていこう、二人で支え合つて生きていこうという決心を感じさせますが、ほとんど女性が支えていますね。男のほうが、坊ちゃん、ボンボンで、それがまた、女性のプライドになるんでしょうか。森繁の「おばはん、頼りにしてまつせ」という、そういうのがなかなかいいと思います。森繁の才能を見た思いがします。「おばはん、頼りにしてまつせ」という言葉、普通一般に今使いますと、えらい怒られます。汚い言葉だつて。しかし、ここの大阪に生まれた私は優しい響きを感じ取ることが出来るんです。自分は何も自慢できない存在であるということ踏まえたくて女性に言っている。一種の甘え、そういう表現です。

織田作之助作品には『木の都』とかいろんな作品がありますけれど、短編小説『蛭』に、龍馬と登勢の恋愛にも似た思慕の情が感じられます。こういうこともちよつと関係してくると思ひましたので、お話しさせていただきます。



(写真5)
谷崎純一郎歌碑

この教室は大手前アートセンターの一室です。建築は安藤忠雄で、彼の美術館建築の初期のものです。道をはさんで向こうに大学の事務所や教室がありますが、そちらへ向かう途中に石碑が立っています。おむすび型の碑と言ったのはこれです（写真5）。

我といふ 人の心は たゞひとり われより外に 知る人はなし

と読めます。これは、谷崎潤一郎本人の直筆です。意味はおのずと分かると思いますが、自分とということの本当の自分のことは自分しかわからないんだと。非常に理知的な歌です。

また、別にこのような句があります。

世の人は われをなにともゆはゞいへ わがなすことは われのみぞしる

「坂本龍馬関係資料」（京都国立博物館蔵）の一つで、国の重要文化財になっております。多分、京都で龍馬は活躍しましたので、これをコレクションにしたんですね。先ほどの谷崎の歌と、同じ内容です。龍馬のこの歌を谷崎は知っていたんですね。

それから、龍馬は神戸の湊川神社でも歌を詠んでいます。

月と日のむかしをしのぶ みなと川 流れて清き 菊の下水

「菊の下水」というのは、勤王の志士の志を暗に言ってるんですね。そして、彼もそうですし、楠正成

がいますね。こういうふうな関連が全部わかってくるんです。先ほどの谷崎の歌を読むと、龍馬の歌を連想しまして、大変な場所、歴史的な場所としての夙川にいるんだということ、私はひしひしと感じます。そして、この歴史的な地域にある大学の本学を大いに利用して、勉強して、龍馬のように世界を引っ張っていくような人材が育ってほしいと思っっています。

来月は谷崎潤一郎についてお話をしたいと思っっています。最近では文学作品はだいたい知られ研究されていて、研究の興味はむしろ本の挿絵がとりざたされています。その挿絵作家と谷崎の関係についてよく調べられているのを見かけます。私は、美術史のほうですので、ちよつと横目で見てたんですけども、『猫と庄造と二人のをんな』（中公文庫、二〇一三年）に収録されている『ドリス』の挿絵を担当した中川修造という挿絵画家の名を見つけました。谷崎が一時、非常にバックアップした画家です。谷崎は、育てるのが好きなんです。じつは、中川修造というのは建築家で清荒神清澄寺（きよらごうしんせいじ）の鉄斎美術館を設計した人です。私は移転前の万博公園にあった頃の国立国際美術館（写真6）に勤務していた時に、展覧会準備のために、作品を借りて中川先生のお宅に伺ったことがあるんです。当時は何とも思っっていませんでしたが、次回では中川修造先生の事についても、写真を紹介してお話したいと思っっています。



（写真6）

万博公園内にあった頃の国立国際美術館

清酒「白鹿」の醸造元、辰馬本家酒造(株)が創業三二〇年にあたる一九八二(昭和五十七)年に、伝統的造りを後世に伝える目的で設立しました。「酒蔵館」と「記念館」で構成されています。一九九五(平成七)年の阪神・淡路大震災で全壊した酒蔵館に代わり、一八六九(明治二)年築の酒蔵を利用した現在の「酒蔵館」は震災の傷跡を残す補強を施し、大桶の中に入ったり、酒造道具に触れる体験ができるようになっています。また「記念館」では酒に因む書画・工芸品・資料を展示する酒資料室、桜の保護・育成に力を尽くした故笹部新太郎氏の収集した桜に関する資料を展示する資料室などがあり、春・秋には特別展を開催しています。

(同博物館パンフレットより)

②白鷹集古館

西宮市鞍掛町5―1 (白鷹緑水苑内)

白鷹緑水苑は、かつてそこにあった蔵元・辰馬家の住居をイメージして建てられた。戦前までの灘の造り酒屋で多くみられた「内蔵形式」が基になっている。蔵元の住居と酒蔵が地続きになっている形式で、毎年変わらぬ繰り返される、その季節その時々には、ない仕事や行事などの、蔵元の「暮らし」を今に伝える空間には、ショップ、レストラン、バー、多目的ホールが設けられている。そして奥に建つ蔵が「集古館」として開放され、白鷹に伝わる昔ながらの酒造り道具、酒器、御料酒を奉納している伊勢神宮の関係



資料など、創業以来の白鷹の酒造りに対する姿勢を知ることが出来る。

(白鷹緑水苑 <http://hakutaka-shop.jp/>)

③辰馬考古資料館

西宮市松下町2-28

財団法人辰馬考古資料館は辰馬悦蔵翁(一八九二—一九八〇)が一九七六年に設立した博物館。翁は銘酒「白鷹」醸造元(北)辰馬家に生まれ、三代悦蔵として家業を継いだ。若くして考古の学を志し、京都帝国大学でながく研鑽をかさね、新進の学徒として日本考古学上の諸問題、とくに銅鐸と玉類等の研究にとりくみ、その学の進歩の一端を担った。

(同資料館パンフレットより)



④上田安子記念館

西宮市殿山町4番26号

学校法人上田学園の会長上田浩氏がこの館長で、上田安子服飾専門学校、大阪総合デザイン専門学校も経営。建物は、㈱一粒社ヴォーリス建築事務所作品(二〇〇九年竣工)。夙川の緑濃き住宅地の中に、朱色の瓦が映え、瀟洒な建物は近隣の人々から愛

⑤黒川古文化研究所

西宮市苦楽園3番町14-50

昭和二十五年十月、黒川幸七（黒川家三代）が、家蔵の古文化財を学術研究の資料に提供し、かつその保存を図るため、土地・建物・資本金とともに寄付して設立した財団法人。当初は芦屋市打出春日町にあったが、昭和四十九年十一月、現在地に新築移転した。収蔵品は、二代黒川幸七（一八七一〜一九三八年）が学術的に意義深いものとの観点から蒐集した中国・日本の美術工芸品や考古歴史資料を主とする、極めて多様な分野にわたる八五〇〇件（二万点）。

（同研究所WEBサイト <http://www.kurokawa-institute.or.jp/>より）



されている。
（株）一粒社ヴォーリス建築事務所は、一九〇五年に伝道師として来日したアメリカ人、ウィリアム・メレル・ヴォーリスが創設したヴォーリス建築事務所が発展したもの。W・Mヴォーリスは「メンソレータム」を販売した近江兄弟社を結成した人物としても知られる。夙川近辺では、関西学院、神戸女学院、六甲山荘、フロイドリープ（旧神戸ユニオン協会）、大丸心齋橋店などが知られている。



⑥野坂昭如『火垂るの墓』 新潮社 平成24年3月25日72刷（昭和47年1月30日発行）

2
「桜狩時絵硯箱」

『日本の意匠 第四卷 桜』／京都書院、昭和五十九年／九三番「桜狩時絵硯箱」の灰野昭郎氏による図版解説・一八一頁を参考、引用した。藤原俊成（ふじわらのとしなり）あるいは「しゅんぜい」の歌《またや見ん 交野のみ野の 桜がり 花の雪ちる 春のあけぼの》（『新古今和歌集』一一四）